

とちゅう、石のお地蔵さまが六つ、からあつとならんで、雪に吹きつけられて立っていました。

「おお、おお、お地蔵さまがた、雪かぶって、さぞ寒かろう」

じさまはそういうと、しよってきたすげの笠を下ろし、お地蔵様の頭に積もった雪をふり払ってはかぶせ、ふり払ってはかぶせました。じさまは自分のかぶっている笠をぬいで、六つ目のお地蔵さまにかぶせ、

「さあ、これでかんべんしてくださいよ」といって、帰っていきました。

笠地蔵といえは、雪の情景を思い浮かべますが、こうやって見ると、実際には雪景色を描写しているわけではありません。

新美南吉「てぶくろを買いに」

『こんぎつね』新美南吉作／岩波少年文庫

さむい冬が北方から、きつねの親子のすんでいる森へもやってきました。

ある朝、ほらあなから子どものきつねが出ようとしましたが、

「あつ。」ときけんで、眼をおさえながらかあさんぎつねのところへころげてきました。

「かあちゃん、眼になにかさきつた、ぬいてちょうだい、早く早く。」といいました。

かあさんぎつねがびっくりして、あわてふためきながら、眼をおさえている子どもの手をおそろおそろのりかけてみましたが、なにもさきつてはいませんでした。かあさんぎつねは、

ほらあなの入り口から外へ出てはじめてわけがわかりました。さく夜のうちに、まっ白な雪

がどっさりふつたのです。その雪の上からお腹さまがキラキラとらしていたので、雪はま

ぶしいほど反射していたのです。雪を知らなかった子どものきつねは、あまりつよい反射をうけたので、眼になにかさきつたと思ったのです。

子どものきつねは、あそびにいきました。まわたのようにやわらかい雪の上をかけまわると、雪の粉が、しぶきのようにとびちって、小さいじがすつとうつるのでした。

するととつぜん、うしろで、

「どたどた、ぎーっ」とものすごい音がして、パン粉のような雪が、ふわーっと子ぎつねにおつかぶきつてきました。子ぎつねはびっくりして、雪のなかころがるようにして十メートルもむこうへにげました。なんだろうと思ってふりかえってみましたが、なにもいませ

んでした。それは、もみのえだから雪がなだれ落ちたのでした。まだ、えだとえだのあいだから白いきぬ糸のように雪がこぼれていました。

雪が子ぎつねにとつてどのように見えるのか、感じられるのかを丁寧に描いてありますね。

国境の長いトシネル抜けると雪国であった。夜の底が白くなった。信号所に汽車が止った。

向側の座席から娘が立って来て、島村の前のガラス窓を落した。雪の冷気が流れこんだ。

娘は窓いっぱいに取り出して、遠くへ叫ぶように、

「駅長さあん、駅長さあん」

明りをさげてゆつくり雪を踏んで来た男は、襟巻で鼻の上まで包み、耳に帽子の毛皮を垂れていた。

もうそんな寒さかと島村は外を眺めると、鉄道の官舎らしいバラックが山裾に寒々と散らばっているだけで、雪の色はそこまで行かぬうちに闇に呑まれていた。

「駅長さん、私です、御機嫌よろしゅうございます」

「ああ、葉子さんじゃないか。お帰りかい。また寒くなったよ」

「てぶくろを買いに」のように雪そのものを描写するために書かれているわけではないけれど、作品の基調としての雪の白さと冷たさがまざまざと描かれていますね。